

理系学部初年次教育としての「地域学」開講の試み

—— 生物資源科学部「秋田の歩き方入門」開講初年度を終えて ——

吉澤 結子*・津田 純*
村田 露崎

渉*・鈴木 英治*
浩*・高橋 秀晴**

1. はじめに

初年次教育は導入教育とも呼ばれ、最近では広い意味で卒業後の社会への適応まで見通した教育を含む扱いもあるが、主要な目的としては、大学生活への適応と学習の動機づけから構成されると考えられる。大学では自主的な学習が求められるところが高校までの学習方法とは異なるが、そこに気付かず新しい学習習慣が身に付かないまま、ドロップアウトにつながっていく学生が増えつつある。そのためにレポートの書き方や資料の収集方法など、大学での学習に必要な学習スキルについて教える必要が生じている。また、基礎学力が不足する学生に対し、高校までに学習しておくべき内容を補完する「リメディアル教育」も含まれる。文部科学省によると、平成17年度にすでに全国210校が実施していたとされる。本学では、開学後3年目の平成13年から、化学、生物、英語のリメディアル学習を実施しており、また、平成20年からは、1年生全員が履修する必修の学部紹介セミナー科目において、メモの取り方とレポートの書き方の講義、および、高校と大学との違いを考えるグループワークなどを実施してきた。

他方、現在の日本社会では、「みずから考え探求して提案を出せる人材」が強く求められている。そのため、大学教育には、学んだ知識や技術を使って論理的思考や高い創造性を発揮できる能力、自律的に自分を向上させる能力、社会のなかで上手に対人関係を築いて仕事をやりぬく能力を兼ね備えた、いわゆる「人間力」の

育成も求められるようになってきた。したがって、学生自身が所属する、あるいは、対象とする「地域」のなかで問題を発見し、解決方法を探求して、これを試みる行動がとれるための動機づけが求められ、地域を考える「地域学」も注目されるようになった。本学部でも、1年次からの社会性の向上と卒業後を展望する学習の動機づけを促進することを目的として、身近な地域産業や地域社会に興味や課題を発見し、学習の動機づけを行う教育の必要性が、指摘されるようになってきていた。

2. 「地域学」の他大学における事例

大学の教養教育を見直す動きは、平成16年の中教審中間報告で述べられている「我が国の高等教育の将来像」のなかで「高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」の一環として、「総合的教養教育」としても掲げられている(文部科学省、2004)。また、それと同じ報告の中に「社会貢献機能(地域貢献、産学官連携等)」を重視する方針が打ち出されており、「地域学」や「地方学」といった科目や講座を充実させるきっかけになったと考えられる。それ以前にも、全国には、地域に根ざした問題の把握と原因説明や解決に取り組んできた大学は多いが、国公立法人化の流れとも呼応して、その大学の立地する地域についてさらに理解を深め、地域問題の改善や地域の発展に役立てようとする動きが活発になった。特に社会学系や教育文化学系学部を持つ多くの大学が、教養科目として地域文化や地域の問題を考える科目を開講し始めた。

たとえば、弘前大学では平成18年度から、「津軽学—歴史と文化」シリーズを開講し(土

*生物資源科学部

**総合科学教育センター

持、2006、2007)、地元の歴史・文化を紹介する教養科目を運営している。平成22年度のシラバスを参照すると、その授業内容は多岐にわたり、弘前ねぶた絵（津軽伝統ねぶた絵師による）、津軽塗（実演を含む）、津軽三味線、郷土の出身の石坂洋次郎、太宰治、寺山修司関連、津軽方言詩、弘前藩等を紹介して、定期筆記試験と講義内容のラーニングポートフォリオ作成を評価課題としている。

また、秋田大学でも平成18年度ごろから、その取り組みが顕著にあらわれ、平成22年度のシラバスを見ると、教養教育科目の地域社会論の中に配置されている24科目中に、科目名あるいは授業テーマ名に「秋田」を冠しているものが13科目見られ、主として教育文化学部担当教員により、自然、歴史、文化、資源、農と食、そして現代的な問題まで幅広く扱う科目群を展開している。

山形大学においては、このような動きが始まる前から、地元の課題をテーマにした研究プロジェクトや教育プログラムには、「山形学」を冠して公開講座なども行われてきた様子であるが、現在では基盤教育院の教養科目として「山形に学ぶ」シリーズ30科目が提供されている（山形大学、2010）。

上記のような教育系学部や医学部を含む3種以上の学部をあわせもつ大学では、講師の守備範囲が広く多彩な講義テーマ構成を組むことも可能であろうし、また、特に教育や医学など人間を対象とする専門分野では、学生の関心事も人間を対象とした文化に重点がおかれている感がある。理系学部においても学生の興味は多様であろうが、専門性から考えると、身近な自然現象から探求への興味や関心を喚起したり人間社会との関係における問題点を見出したりして学習と探求に進め、その成果を実社会に還元していく動機づけが必要となる。したがって、「地域学」の持ち方については、それぞれの学部の専門性や学生の気質、大学のおかれた事情や特色の違いによって、それぞれに最適化していく必要があると考えられる。

3. 本学部における「地域学」開講の検討

本学の特に生物資源科学部でも、平成19年ご

ろから地域学の開講を検討したが、研究・教育で取り扱う題材である生物資源の課題の多くは、地元秋田に根ざすものが多く、そのために多くの講義の中ですでに、断片的だったり一面的だったりはあるけれども、秋田について紹介する機会は多かった。そのことで、ことさらに秋田を紹介する新規科目の開講の必要があるかという議論があり、当時はむしろ、いわゆる「秋田学」の開講には消極的であった。また、その間に秋田大学は文科省GPの一環として「秋田戦略学」を開講したが、その内容の多くは社会学系で、本学部生の興味や関心に対して若干のずれがあったようで、単位互換の特典があるにもかかわらず、受講生数はごくわずかにとどまっていた。

本学部での「地域学」の開講を実現する大きなきっかけとなったのは、学生が卒業研究の打ち合わせや就職活動などで他大学や企業の方と話す機会に教員が同席し、3年以上を過ごした秋田に関する学生の知識がいたって貧弱であることを見出したことだった。すなわち、秋田出身者は、地元が好きという気持ちがあっても、県外での生活経験もないことから、秋田の真の良さや問題点についての冷静な視点が育っていない感があった。また、県外学生においても、4年間過ごしたのちも秋田に関する知識はいたって貧弱であることが多かった。日常的には大学とアパートとアルバイト先等の数か所の往来に終始する学生が多いなかでは、4年間暮らす秋田について幅広く正しい知識を得る機会は非常に少ないためと想像された。元来、18歳からの大学生活4年間は、青年からおとなに移行していく時期であって、そこで得る経験はその後の人間性や社会性の基盤になっていると考えられる。したがって、この4年間を過ごす土地と人に興味を持って積極的に近づき、何を体験し吸収するかは、より広い視野や柔軟なものの見方・考え方を身につける岐路になると考えた。このような事情が、本学部版「地域学」の開講に踏み切るきっかけを作った。

本稿は、このようにして平成22年度から生物資源科学部の教養教育科目として開講した「秋田の歩き方入門」の準備経緯と実施初年度の開講状況を紹介し、広く議論を求めて、そのあり

方を検証し、今後の授業改善に役立てることを目的とした。

4. 「秋田の歩き方入門」の構想と企画

著者らの所属する秋田県立大学は、工学系システム科学技術学部と農学系生物資源科学部の2学部を有する理系大学と、両学部の教養科目を主として担当する総合科学教育研究センターを持つ。しかし、総合科学教育研究センターは、教員定員や担当科目の種類が限られている。また、一方、生物資源科学部では、農業、林業、食品産業、医療産業、環境関連産業とかかわりが深く、白神山地をはじめとする山野や八郎湖を題材とした研究、米や野菜等の地場農産物製造に関わる研究、地元の酒造や食品メーカーとの共同研究等、地元の生物資源を取り扱う研究や教育がすでに行われており、これらを紹介する講義も一部の学科では学部1年から組み込まれている。したがって、本学部の教養科目における地域関連講義は、学科間や教員間の軽重の格差を均して、どの学科の学生も均一な「秋田の基本事項」を身につけるところを目標とした。このような方針に立って、当初は試行的に1科目をスタートさせ、このなかに「秋田の基本事項」を盛り込むことを考えた。一般的な基本事項として、地理・歴史・伝統文化の概観を入れ、また、生物資源を扱ううえでは、行政側からみた農業・林業を組み入れた。学部内の専門科目では扱うことが少ない水産業の紹介を入れ、専門性は離れているが産業上重要な工業・鉱業の概説を加えた。科目名は、秋田で生物資源を学び研究する4年間の旅の案内書という気持ちを込めて「秋田の歩き方」とし、初級入門編という意味合いから「秋田の歩き方入門」とした。実際に、入学直後に大学周辺や市内の土地勘を得てもらい、地元の方々とのふれあいの機会を作る目的から、市内にある博物館等の文化施設を、自分で公共の交通機関を用いて「歩いて」見学してくる企画を加えた。講師として、学内教員のオムニバス形式も検討したが、「秋田の基本事項」という観点から、その他の専門基礎科目や専門科目とは異なる視点で秋田を取り扱う講師を検討し、県立大学という特色を最大限に生かして、秋田県庁職員や学芸員に講義依

頼することとした。

5. 「秋田の歩き方入門」の概要と履修状況

授業の目的としてシラバスに掲げたことは、「秋田は、古代からの城郭遺跡や宗教行事遺跡が発見されるなど、古くからひとが住んで営み続けてきた地域である。現在も豊かな自然と独特の文化が守られてきており、そこに各種産業や都市機能を発展させようとする人々の暮らし方には学ぶべきものがある。本科目により、大学生活4年間を過ごす秋田の地域特性と地元の人々をよりよく理解し、大学での学業や友人との出会い以外にも、秋田の地域とひとから体験・吸収し、その結果、より広い視野や柔軟なものの考え方を身につける。」であった。

また、授業概要として、「本科目は、講義と現地見学で構成し、過去と現在の秋田に関して、地理、歴史、政治、経済、産業、文化などについて学習する。また、関連する文化施設の現地学習では、学生自身が各種交通手段を利用して秋田を“歩く”ことで、秋田のひとと文化に多くふれる機会を作ることも目指す。」とし、3回の自由見学を入れるなど通常の授業と進め方が若干異なることから、初回に詳細なガイダンスを行って、見学の要領やレポートの書き方について説明した。

各回の授業実施内容は、平成22年度の例で示すと以下のように行った。

授業計画【講師】

1. ガイダンス（授業の目的、進め方、評価方法、現地見学等説明）【吉澤（生物資源科学部）】
基調講義「秋田の歩き方入門」【高橋秀晴（総合科学教育研究センター）】
2. 秋田県の概要【秋田県総合政策課政策監】
3. 小泉瀉の県立博物館見学
4. 秋田の歴史散歩【秋田県立博物館副館長】
5. 千秋公園内等文化施設見学
6. 秋田の民俗探訪【秋田県立博物館学芸主事】
7. 秋田市民俗伝承館（ねぶり流し館）見学
8. 秋田の美術概観【秋田県立近代美術館副館長】

9. 秋田の林業【飯島泰男（木材高度加工研究所）】
10. 秋田の水産業【杉山秀樹（客員教授）】
11. 秋田の経済と産業の概要【秋田県産業政策課政策監】
12. 秋田の農業【秋田県農林政策課副主幹】
13. 秋田の工業【秋田県地域産業振興課班長】
14. 秋田の鉱業【秋田県資源エネルギー産業課班長】
15. 総括レポートの作成について【吉澤】

また、成績評価の方法は、見学3回および講義から2回分を選んで、レポート作成させ評価した。

履修登録の結果、1年生が68名、3年生1名、4年生2名、社会人聴講生1名の計72名が受講した。今年度の1年生は161名だったので、1年生の42%が受講したことになる。出席率は前半の歴史、民俗、林業、水産業は非常に良好だったが、後半の工業等は、学部の性格のためか若干下がった。また、最終回にFD主催の授業アンケートのほかに後述のアンケートを依頼したが、当日は出席率が低く、回収率は46枚（64%）にとどまった。アンケート結果は次項に述べるように、受講生の評判は良好と受け止められたが、講義テーマの順番など講義計画の再検討は必要かもしれない。

6. 受講生へのアンケート結果と考察

最終回の授業において、通常のFD主催の授業アンケートの他に、独自アンケートを実施し感想を求めた。次年度の授業改善に役立てるために学生の協力を依頼し、以下の設問に回答を求めた。

【アンケート設問】

設問1. 全般的な感想を述べてください。直感的なことでも結構です。（自由記載）

設問2. 良い印象が残っているテーマに、3つまで○をしてください。（見学を省く11種）

設問3. （2の11種の中で）要望や提案がある（もっとこうあって欲しかった）テーマがもしあったら、3つまで○（なければ、空欄でも良い）をしてください。また、それらに対する要

望・提案を具体的に次欄に記入してください。（自由記載）

設問4. 見学先について、良い印象が残っている順に番号を入れ、1番にした施設について、良かった理由を下に書いてください。（自由記載）

設問5. 見学先について、他に加えた方が良いと思ったところがありますか？ 例をあげてください。

設問6. その他、上記以外で述べたいことがあれば書いてください。（自由記載）

その結果は、おおむね以下のようにまとめられる。

設問1の全般的な印象に対する回答では、76%の回答が「役に立った」「勉強になった」という語句を用いて回答していた。そのなかで、みずから県内出身者と記載した8名が、「住んでいたのに知らないことが多かった」と回答した。また、県外あるいは市外出身と受け取れる記述とともに、「県民以上に知った気がした」、「秋田に来て良かった」というような回答も8名ほどあった。

設問2のテーマに対する質問では、「3種まで選択」との指定にもかかわらず全てを選択した回答が2名あったが、複数回答で最も選択数が多かったのは、民俗（26名）、次いで農業（21名）、林業（18名）、歴史および水産業は同数で各16名、残りのテーマはすべて、ほぼ同程度の人数（5～11名）から選択されていた。

設問3の要望や提案への回答はほとんどなかったが、「特産食品」や「秋田美人」について聞きたかったという記載が各1名あった。

設問4の見学先については、県立博物館、久保田城御隅櫓、秋田市民俗伝承館の3か所いずれの施設も、1番にした回答をほぼ同数得ており、これは学生の個性と興味で分かれることが示されたと考えられる。

設問5には、近代美術館、水族館GAO、尾去沢鉱山跡地、白神山地があがった。

設問6で上記以外の意見を聞いたところでは、記載している学生はほとんどいなかったが、「名物や観光についても聞きたかった」という学生が1名あった。

上記の結果を総括すると、本科目の受講生は概ね講義内容や見学による体験に満足した様子がうかがえる。設問4の理由に、「千秋公園の桜やつつじが綺麗だった」という感想が4、5名あり、1年生にとっては入学直後の4月下旬から5月上旬で、秋田では桜やつつじや新緑の美しい時期に見学を入れた目論見はあたり、学生が個別に大学近辺や市内の公園と繁華街を散策し、美しい秋田を肌で楽しむ機会となったことは、この科目の目的の一つを達したのではないかと考えられる。また、3年生や4年生の受講生が2～3名あり、個別にインタビューしたところでは「県内就職を目指しているので県内産業や経済の現状を知りたい」という現実的な受講動機を述べており、当初の目的にはなかったが、そのような利用にも応えられたと考えている。設問2のテーマへの関心に対する回答で、民俗のような日頃聞く機会が少なく新鮮な話題と、やはり生物資源に関わるテーマとに集まるものの、興味の多様性も表れていると見受けられた。「他の講義では聞けそうもない」テーマや講師への新鮮さが、科目への満足度の大きな要素と考えられた。

しかしながら、今後の検討課題として、いくつかの課題も提起されたと受け止められる。このような科目では、全ての受講生を満足させるテーマ構成は難しい課題である。一部の学生は、見学や他の授業には含まれない民俗学を非常に新鮮に受け止め、ともすれば、産業や経済の現状と課題を紹介する講義を厳しく感じた様子はある。これらをどう紹介し、学生がみずからも関わる問題としての認識をいかに高めていくか、今後考えていく必要はある。また、例えば、アンケート回答の自由記載から、観光案内や名産・名物案内を期待する、あるいは、見学を全員一緒に出かけるフィールドワーク的な活動として希望する回答があり、講義前のガイダンスの徹底とともに、前述の「津軽学」の持ち方も参考に、テーマの選択に検討を加えていくことも、今後の課題ではある。

7. おわりに

生物資源科学部の「秋田の歩き方入門」は、このようにしてスタートした。開講初年度を終

了して、履修状況と事後アンケート結果から、この実施形態がまずまず順調なすべりだしではなかったかと考えている。受講生は、アンケート結果やレポート内での感想の記述をみると、講義内容や見学による体験におおむね満足した様子であった。検討課題として、全ての受講生を満足させるテーマ構成は不可能であるが、1コマでは時間的に足りないテーマが多かったのも事実である。たとえば、要望としてのキーワードに、特産食品、近代美術館、水族館 GAO、尾去沢鉱山跡地、白神山地、名物・観光地などが挙がっており、文化や歴史、地域の特色の部分をさらに充実させる要望とも受け取れる。本科目の「秋田の基本事項」を「網羅的」に概説する趣旨を貫くなら、「秋田の歴史と民俗」のような新科目の追加も必要かもしれない。

理系学部における「地域学」の持ち方という観点では、良い印象として残ったテーマとして、民俗、歴史以外では、農業、林業、水産業の順に挙げられていた点に注目した。学生の学ぼうとする専門に近い分野だが、教員による専門性に特化した講義の前に、行政側からみて全体を概観・俯瞰する講義があったことで、今後の学習への動機づけや幅広い視野の涵養にどう関わったか、今後検証していきたい。

最後に、今回の事後アンケート結果では、出身地を問う設問をあえて設定しなかったため、出身別の分析できなかったが、レポートに記載された感想として、県外からの学生で、「自分の地元にも秋田とは違った歴史や文化、現状での課題があるはずで、次回の帰省の際には調べてみたい」という趣旨が複数名見受けられ、「地域学」が広義の目的とする学生の地域にたいする問題意識の喚起に、少なからず効果があったのではないかと考えている。

謝 辞

本科目を運営するにあたり、秋田県庁職員の皆様に、講義担当および準備の面で、全面的なご支援を賜りました。また、本学事務局長谷部功氏、佐々木直人氏に多大なご助力を頂きました。この場を借りて、深く感謝の意を表します。

参考文献

文部科学省（2004）「我が国の高等教育の将来像」＜中央教育審議会中間報告（H16.12.20）ポイント＞、[http:// www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu11/siryo/05012101/005/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu11/siryo/05012101/005/001.pdf)

土持ゲーリー法一（2007）「津軽学—歴史と文化」の授業を終えて. 21世紀教育フォーラム（弘前大学21世紀教育センター刊）、2、102-

105.

土持ゲーリー法一（2006）「21世紀教育特設テーマ科目」の紹介「津軽学—歴史と文化」への誘い. 21世紀教育フォーラム（弘前大学21世紀教育センター刊）、1、66-68.

山形大学（2010）山形大学シラバス2010年度版、基礎教育科目、<http://campus3.kj.yamagata-u.ac.jp/syllabus/2010/7sylla.htm>